愛知淑徳大学論集－交流文化学部篇－　創刊号　2011.3　67－83

集落景観・地域文化を守り活かす地域づくり
～沖縄県竹富島における観光文化研究（3）～

A Study on Community Development through in the Preservation and the Practical use of the Traditional Village's Landscape and the Regional Culture
― A Case Study on the Touristic Culture in the Taketomijima Island,Okinawa Prefecture（3）―

谷　沢　明
TANIZAWA, Akira

要旨

沖縄県竹富島の人口は、「重伝建」に選定後6年目（1993年）にして上昇傾向に転じた。いったん島を離れた若者が帰島し、観光業の後継者として島に根をおろしていく現象が起こったのである。竹富島はいかにして地域の魅力を創生して、人を惹きつけたのであろうか。それは、集落景観の保全を基軸に、自然景観の保全、伝統工芸・伝統芸能の継承を含めた総合的な地域づくりが開始されたからである。竹富島における集落景観及び地域文化を守り活かす地域づくりは、あくまで島に暮らす人が、島民にとって豊かで魅力ある土地を創りあげようとするものであり、その心意気が、観光客を惹きつけていった、ととらえることができる。

はじめに

沖縄県竹富島は、1972年の本土復帰以降、度重なる困難を克服し、島民が一致団結して自律的な観光地を形成してきた。その経緯は、拙稿「沖縄県竹富島における観光文化に関する考察」（2009年）[1]、「1970年代前期の開発と保存に関する動向」（2010年）[2]、「1980年代の集落保存に関する動向」（2010年）[3]において述べたとおりである。

無節操な開発行為を法的裏づけをもって規制し、島の自然・文化を将来的に末長く守っていくために島民総意で選んだ道が、国の重要伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建」という）選定（1987年）であった。また、「重伝建」選定に先立ち、これまでの島民の申し合わせ事項を明文化し、集落景観保存についての必要な措置を国、県、町に対して要請していくために起草されたのが「竹富島憲章」（1986年制定）であった。

豊かな自然環境にある竹富島は、「民芸の島」、「芸能の島」としての特性を活かしつつ、地域づくりを推進し続けてきたところである。本稿では、喜宝院蒐集館所蔵資料及び、関係者のイ

ンタビュー調査を中心に、主として「重伝建」選定以降、1990 年代にかけておこなわれた各種取り組みを整理する。そして、集落景観及び地域文化を守り活かす地域づくりが観光文化振興にどのように関わり、地域社会の魅力をいかに創生してきたかについて考察したい。なお、文中、敬称を省略したことをおことわりする。

1. 時代背景

竹富島が「重伝建」に選定された 1987 年は、いわゆる「バブル経済」（1987～91 年）の時期に当たっている。1980 年代半ばから 1990 年代初めにかけて、「バブル経済」により生じた豊富な資金をもって新事業進出を図る企業の投資意欲が高まり、わが国は、いわゆる「リゾート開発ブーム」に沸き立った。「総合保養地域整備法」（1987 年）の成立は、まさにその時代を象徴するものであった、といえよう。

沖縄県では、「第二次沖縄県復興開発計画」（1982～1991 年）において、特色ある自然風土と独自の文化遺産を活かした観光レクレーションの場の開発整備等を促進する施策が進展していていた。計画策定当時 200 万人を切っていた観光客数を 300 万人に引き上げる目標を掲げ、沖縄本島北部圏では海辺リゾート開発計画の促進、中南部圏では歴史・文化遺産を活かした観光、離島においては自然環境を活かした観光がうたわれた。1983 年の万座ビーチホテルの開業以降、恩納海岸を中心に大型リゾートホテルが建ち並び、「リゾート地沖縄」のイメージは、この時期に名実ともに確立する。ちなみに、沖縄県の観光客入込数は 1982 年の 1,898,216 人から、10 年後の 1991 年には目標に到達する 3,014,500 人と、1.59 倍の伸びをみせた。[4)]

その後策定された、「第三次沖縄復興開発計画」（1992～2001 年）においては、観光を、地域特性を活かした先導的、戦略的産業として位置づけ、地域経済の活性化の柱としてより重視する方向が示され、2001 年の観光客数の目標が 500 万人に設定された。ちなみに、沖縄県の観光客入込数は 1992 年の 3,151,900 人から、10 年後の 2001 年には 4,433,400 人と、目標には到達しなかったものの 1.41 倍の伸びをみせた。

このような沖縄県を訪れる観光客増大の背景として、観光地の整備、メディアによるイメージづくり、航空運賃の引き下げ等が挙げられる。観光地の整備として象徴的なものは、沖縄戦で焼失した首里城正殿の復元（1992 年）であろう。首里城の復元が成り、一般公開が始まった 1993 年、ＮＨＫドラマ「琉球の風」が放映される。これは、沖縄の本土復帰 20 周年を記念して制作された大河ドラマであり、琉球王国の歴史・文化を全国的に情報発信する契機となった。また、航空運賃は、通行税廃止による値下げ（1986 年）に始まり、国内事前購入割引の導入（1995 年）、本土―沖縄路線での空港使用料の引き下げに伴う値下げ・規制緩和に伴う安価なパッケージ商品の誕生（1997 年）等があり、低価格で沖縄に行くことができる環境が整えられた。さらに、2000 年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産に登録された。このような動きをみると、バブル期から 1990 年代にかけては、観光地・沖縄の存在感がますます高まっていった時期、ととらえることができる。

2. 竹富島の状況

観光地･沖縄の地位が高まりをみせた時代に後押しされ､八重山諸島にある竹富島にもまた、多くの観光客が訪れるようになった。ちなみに、「重伝建」選定の 1887 年から 2000 年にかけての観光客数の推移は〈表 1〉のとおりである。

〈表 1〉 竹富島の観光客入込数の推移　（単位：人）

年	1987年	1990年	1992年	1993年	1995年	1996年	1997年	1998年	2000年
観光客	71,882	92,346	129,321	128,688	109,269	114,073	130,260	181,405	268,289

（竹富町商工観光課）

竹富島の集落が「重伝建」選定された 1987 年、竹富島を訪れた観光客は、71,882 人を数えた。「重伝建」選定 5 年後の 1992 年には、観光客数は 129,321 人（1.8 倍）に増大し、2000 年には 268,289 人（3.7 倍）と、破竹の勢いの伸びをみせた。

この増加率を、沖縄県観光客入込数と対比してみたい。沖縄県観光客入込数は 1987 年に 2,250,700 人を数え、2000 年には 4,521,200 人（2.0 倍）となっている。12 年間の観光客増加率は、沖縄県の 2.0 倍に対して、竹富島では 3.7 倍の数値を示している。この数値の違いは、果たして何を意味しているのであろうか。

竹富島では､「バブル期」から 1990 年代にかけて、沖縄本島でおこなわれた「リゾート開発」には無縁であり続けた。過去の幾多の苦い経験を糧に、自律的観光地づくりを貫いてきた島が竹富島である。それでいて、竹富島を訪れる観光客数は急増しているのである。島民は、バブルに浮かれることも、時代の流れに翻弄されることもなかった。

もうひとつ注目したいことがある。それは、竹富島の人口動態である。隆起珊瑚礁の島という、土地条件に恵まれぬ地で生計を立てていくためには、島民の苦労は並大抵のものではなかった。1955 年に 1,054 人を数えた島の人口は、本土復帰の 1972 年には 334 人に減少し、1992 年には過去最少の 251 人まで落ち込んでしまった。度重なる旱魃や台風の被害により、農業では暮らしが立ち難いと、島を離れていく人びとが後を絶たなかったのである。ところが、1992 年を境に、その後、人口は徐々に増え始めるのである（〈表 2〉参照)。

〈表 2〉1990 年代竹富島の人口の推移　（単位：人）

年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年
人口	251	256	259	262	277	280	284	301	303

（島民による秋季実態調査資料から）

微増ではあるものの、人口増加の動きは今日も続き、現在、竹富島の人口は 347 人（2010

年９月）を数えている。この人口増加は、観光を生業としてこの島で暮らしていける、という見通しのもとで成り立つものである、と理解される。すなわち、いったん島を離れた若者が帰島し、観光業の後継者として島に根をおろしていく現象が起こったのである。後継者が島で暮らしていくためには、結婚相手が必要である。しかし、その心配はほとんどなく、竹富島に働きに来ていた島外出身の女性と結婚するケースが多くみられる。

「重伝建」選定６年目にして、ようやく、新たな島の暮らしの立て方が見え始めたのである、ととらえてよいであろう。

しかしながら、伝統的な赤瓦の集落景観を保存したから、竹富島で観光業が成り立つようになった、という見方は、必ずしも当てはまらない。この時期、古い町並みを保存して観光客を誘致して経済の活性化につなげようとする方式は、すでに過去のものになっていた。我が国の町並み保存の元祖として知られ、「竹富島憲章」起草や竹富島の「重伝建」選定に多大な影響を与えた長野県妻籠宿の事例がそれを示している。

長野県妻籠宿は、明治百年記念事業として、1968 年から集落の保存事業が開始され、過疎の山村を観光地として見事に蘇らせた先駆的な地域である。保存事業から 20 年が経過した妻籠宿では、「妻籠宿見直し調査」（1985～88 年）[5]がおこなわれた。その結果明らかになったことが、報告書に次のように記載されている。[6]

〈近年妻籠には年間 60～70 万人の観光客が訪れ、その名は広く知れ渡っている。しかし観光客が多くとも、その滞留時間は短く、観光収入の延びは少ない。保存の妻籠で人を呼び、地元経済に活性化を与えた時期は、すでに去ったと思われる。〉

すなわち、復元保存された町並みは、退屈で、古臭い、刺激の少ない観光地として見なす観光客も少なくない、といった点が指摘されたのである。そして、「過疎からの脱却」をうたい文句にして保存事業を推進したものの、結果的に人口減少を食い止めることができず、高齢化がすすみ、世代交代が危ぶまれる、という状況に直面したのである。

妻籠宿の住民がそのような危機感を抱き始めた 1980 年代後半、竹富島では集落景観の保全を基軸に、自然景観の保全、伝統工芸・伝統芸能の継承を含めた総合的な地域づくりが開始された。「保存で人を呼ぶ時代は去った」と言われる時代の中で、竹富島はいかにして地域の魅力を創生して、人を惹きつけたのであろうか。以下、「重伝建」選定以降、竹富島で展開された地域づくりの動きを具体的に記してみたい。

3. 島民主体の集落景観の保全活動

集落景観の保存事業は、地域住民と行政が連携し、いかに協働して推進していくかが重要な課題として挙げられる。すなわち、行政からの一方的な規制を住民が受けるのではなく、住民自らが保存の趣旨を理解し、住民の主体的な参画があって初めて、良好な保存事業は成り立つ、といえよう。

そのシステムは、「竹富島憲章」（1986 年３月 31 日制定）の中から生まれた。「竹富島憲章」

を円滑に履行するために、地域の自治組織である公民館（現、地縁団体法人）に「集落景観保存調整委員会」の設置が盛り込まれたのである。すなわち、各地区（東集落、西集落、仲筋集落）から選出された 12 名の委員で集落景観保存に関する事項を審議する組織ができあがったのである。

「竹富島集落景観保存委員会設置要綱」（1986 年 6 月 12 日施行）が施行された当日、初の保存調整委員会が開かれた。委員には、公民館議会委員・老人クラブ・婦人会・青年会の各代表 12 名が選出され、これに公民館執行部が加わった。[7]公民館執行部とは、館長・副館長・主事・幹事のことで、公民館役員のリーダーに当たる。初会合では、次のような話が出た。[8]

〈“町並み保存” は国も絡む大きな仕事なので、いろいろな組織が必要になってくる。何といっても、住民の意向が反映されないと、血の通ったものにはならない。心なごむ風格のある島づくりを目指しましょう。〉

「心なごむ風格のある島づくり」、それが島民の抱いていた地域の将来像であった。その目標に向けて、自治的な公民館活動の一環として委員会活動が始まったのである。

この自治組織と一体化した「集落景観保存調整委員会」の設置は、長野県妻籠宿の「妻籠を愛する会」[9]の組織とも類似点がある。地区全住民を構成員とする網羅的組織「妻籠を愛する会」は、四部会九委員会から成っており、四部会の一つである「保存推進部（統制委員会）」が竹富島の「集落景観保存調整委員会」に相当する。また、「妻籠を愛する会」結成に当たって基本となった「たとえ小さな力でも、地域に対し住民こぞって力を出し合い、地域づくりをやっていこう」という精神が[10]、竹富島に影響を及ぼしていることも重要である。

発足当時の「集落景観保存調整委員」は、現在、「町並み調整委員」として、公民館役員組織[11]としての位置づけがなされている。

竹富公民館の活動で注目されるのは、伝統的な地域の祭事・行事と一体化した活動がきわめて多いことである。「公民館祭事・行事」として位置づけられたものに、国の重要無形民俗文化財に指定された種子取祭をはじめ、21 の祭事・行事がある。公民館執行部は、すべての祭事・行事に参加することになっている。とりわけ種子取祭は 9 日間に及ぶ祭事であり、ほかにも 2～3 日にわたる祭事がいくつかあるため、1 年のうち 37 日間は地域の祭事・行事に関わることになる。

祭事・行事をとおして、公民館役員のみならず、地域住民の絆は深まっていく。現在、竹富公民館長を務める上勢頭芳徳は「種子取祭と町並み保存」[12]に次のように記している。

〈（「竹富島憲章」の）基本理念の一項にも「伝統的祭事行事を島民の精神的支柱として、民俗芸能、地場産業を生かし、島の振興をはかる」としている。すなわち、町並み保存といっても単に赤瓦の家、サンゴ礁の石垣、白い砂の道と庭といった形を残すだけでなく、形は心の表われとしたら、伝統的な祭事行事をきちんと継承していくことができるかどうかにかかっている。（中略）誇るべき好ましい環境に住み、しかもそれが良質の観光者を魅きつけることになるとしたら、島にとってこれほど好都合はない。〉

単に集落景観を残すことにとどまらず、そこに暮らす人びとの精神文化の高揚を含めて、保存活動を考えていることが読み取れる。このような意識が、公民館活動の一環である「集落景観保存調整委員会」の議論の場を通じて、島民に共有されていくことは意義深い。

「集落景観保存調整委員会」は、公民館で開かれるのが恒例である。何度か、その場に同席した学生の森下愛子は、見聞を次のように語る。[13)]

「委員の皆さんは、夕ご飯を食べ終わって公民館に集まってきます。提出された図面と景観マニュアルの冊子を見ながら、細かいところまで熱心に話し合いをします。“美意識を持っていないと町並みは守れない”と、そんな話も出ます。私が行ったとき、公民館ではほかに、お祭の踊りの稽古をしていました。委員会での議論が一段落すると、今度は踊りの稽古を見ながら、楽しそうに話をしていました」

「美意識を持っていないと町並みは守れない」、この一言は重要である。単に建物の形態を議論するに止まらず、その背後にある意識まで問題にしているのである。また、「集落景観保存調整委員会」がひけた後、多くの人が居残り、更なるコミュニケーションを深めている姿も重要である。委員としての義務を果たすだけでなく、委員会というコミュニケーションの場が、総合的な地域づくりに結びついている姿が浮かびあがってくる。

「竹富町歴史的景観形成地区保存条例」（1986 年 3 月制定）においては、保存地区内における建築物等の新築・増築・改築・移転・除去をはじめ、各種の現状変更行為は、あらかじめ教育委員会の許可を受けなければならない、と記載されている。しかし、実際の手続きとしては、まず、設計図を添えた「現状変更申請書」を調整委員会に提出し、そこで検討・協議がなされる。そして、その結果が教育委員会に諮られて、事が進んでいくのである。[14)]

保存地区では、伝統的家屋の修理と並行して、非伝統的家屋の修景もおこなわれる。修理の場合はその技法が確立しているが、町並みに調和する建物をつくる「修景」の場合、判断基準に曖昧さが生ずる。条例ができても、具体的に目安となるものが、しばらくはつくられなかった。その指導指針として策定されたのが「竹富島景観形成マニュアル」（1994 年 3 月）[15)]である。このマニュアルは、いわゆるハウツウ的な「マニュアル」ではなく、より質の高い集落景観の形成と、コミュニティの調和的発展を目指す、広い視野から纏められている。[16)]

この景観マニュアルが整えられた 1990 年代半ばをもって、住民主体の集落景観保存事業はようやく軌道に乗った、ととらえてよいであろう。

4. 風土・祭事に合わせた住まい

竹富島の集落を構成する民家は、風土に合わせ、また伝統的な祭事を考慮してつくられている。屋敷は、高さ約 1.5 メートル、幅 70 センチ（上端）～90 センチ（下端）程の珊瑚の石垣で囲まれ、石垣から 2.5～3 メートル下がって高さ約 1.5 メートルのマイヤシ（ヒンプン）を立て、その奥にウフヤ（母屋）、トーラ（炊事場）を配置するのが標準的な造りである。屋敷にはフクギの防風林を立てることが習わしであったが、切り倒されたものも少なくない。ウフヤは

総じて南向きであり、東から、一番座、二番座、三番座と並列し、裏側にウラザと呼ぶ部屋がつくられている。ウフヤの軒高は、2メートル前後と低く、軒の出も45センチ前後と短い。トーラはウフヤの西側の三番座近くに配置するのが習わしである。

このような伝統的な住まいにたいして、上勢頭同子は、次のように話す。[17]

「竹富島は、南の風がいちばん涼しいし、心地よいです。だから、私たちは南を広く開けて家を建てます。でも、真南には向けない。真南に向けると、風が真っ直ぐ入ってきます。台風の時は、すごく強い風が吹きますから、少し西にふるんです。見た目は真南に見えるんだけれど、実際は少し西を向いています。真南に家を開けないのは、台風を避けようとする智恵です。そして、南から入った風を抜かすはけ口をつくります。家に入った風は、みんな外に出すものでした」

まさに、風土にあった造りが受け継がれて、統一的な集落景観を形づくってきたのである。また、上勢頭芳徳は、住まいと祭事の関係を次のように話す。[18]

「早い時期に都会から帰ってきた人たちが、瓦ものせないで、間取りも伝統的な間取りでないまま家をつくったケースがあります。やがて、その人たちが島の役員をやり、種子取祭のとき、自宅で島の長老たちを接待することになります。そのときに、伝統的な間取りでないと不都合が起こるのです。祭の時の出入りは、玄関は使わず、庭から縁側を通って座敷に上がるのがしきたりです。そして、一番座に座って、位牌のある二番座に向き直る。伝統的な間取りでないと、これができないんです。このような経験をした先輩たちが、若い人たちを説得するのです。“お前、規制が厳しいなんて文句を言っているけれど、家を建てるときには気をつけろよ。役員をやるときに失敗するよ。恥をかくことになるよ”と」

島最大の行事である種子取祭の際、たとえば、その年の公民館主事は、早朝行われる「参詣」行事において、神司5名、島の長老、東京・石垣・沖縄郷友会会長など数十名の人を、自宅に迎えて接待することになる。また、初日の奉納芸能が終わった後、夜通しおこなわれるユークイ（世乞い）行事においても、二十数軒の家で、訪れた人々を座敷に迎え入れて接待する風習が受け継がれている。

この種子取祭に奉仕することは、島で生きていくうえで、もっとも大切なこととされている。すなわち、祭りをとおして神に奉仕することに通じるからである。上勢頭芳徳は、続ける。[19]

「国の補助事業では、外観だけ残せばいいですよ、中は自由にやっていいですよ、と言っているのに、“いや、いや”といって、伝統的な家にするのです。これは、文化の見直しですね。芸能を昔の形でおこなうだけでなく、家を昔の形でつくるのも文化の見直しです。“文化を守ろう”と、口で言うだけでは、守りきれない。そこに何がしかの価値を見つけ出さないと、文化というのは伝わりません」

これは、竹富島の集落景観保全の根本を言い当てた言葉ではないだろうか。

5.島を美しく保つ力

竹富島は、自然をはじめ島そのものが、清らかな空気に包みこまれている。日本民芸協会の一行を引連れて竹富島を訪れ、その魅力を全国に紹介した外村吉之介は「世にも美しく純粋な姿」[20]に、1960 年代前期の竹富島の情景を、次のように記している。

〈ここは家並や石垣が整い、掃除の行き届いたことで模範になっています。村全体がさながら公園なのです。赤瓦の本瓦の家と茅葺の家がまじって、どの家も石垣をめぐらし、座敷の前庭に目かくしをもっています。(中略) 道はサンゴ礁の破片が敷かれて白く清らかにつづいています。〉

外村吉之介は、隅々まで掃除が行き届いている島に感心している。外村とほぼ同じ時期に竹富島を訪れた、民芸に造詣の深い美術史家・水尾比呂志（現、日本民芸協会会長）は「竹富島のこと」[21]に、次の文をしたためた。

〈島中の道は、海辺に無尽蔵にある珊瑚の白砂でおおわれている。石垣は累々と道の両側に立ち並び、その不思議な自然の造型の妙は見ても見ても見飽かぬ。（中略）まことにこの島は、島全体が庭であり、その庭は自然の力の偉大さと、自然に頼れば人間が易々として美を生むことのできる摂理をこの上もなく美事に示してくれているのである。〉

自然と人間の謙虚な関わりの中から生み出された竹富島の情景。まさに美の本質に迫る描写である。水尾比呂志は、本当の文化、本当の人間性とは何かを、竹富島の佇まいから鋭く嗅ぎとっている。

復帰間もない 1974 年に竹富島を訪れた作家・司馬遼太郎もまた、『街道をゆく 6 沖縄・先島への道』[22]に、次の一文を記している。

〈集落は、じつに美しい。本土の中世の村落のように条理で区画され、村内の道路はサンゴ礁の砂でできているために、品のいい白味を帯び、その白さの上に灰色斑というべきサンゴの石垣がつづき、そのぜんたいとして白と灰色の地の上に、酸化鉄のような色の琉球瓦の家々が夢のようにならんでいるのである。〉

外村吉之介、水尾比呂志、司馬遼太郎のいずれもが、竹富島の美しさを称賛して止まないのである。そして、この佇まいは、外村が指摘しているように、島民のたゆまぬ掃除により保たれていることを忘れてはならない。

「竹富島憲章」の保存優先の基本理念（すぐれた文化と美しさの保存がすべてに優先される）の一つに、「汚さない」がある。「汚さない」は、憲章に「海や浜辺、集落など島全体を汚さない。汚させない」と、記されている。この意識の高さ、そしてこれを持続する島民の努力に、島を訪れる観光客は心を洗われるのである。

島を美しく保つ習慣は古くから、当たり前のように受け継がれていた。その、当たり前のことが、ごく自然に生活の中に根づいていることが、竹富島の魅力を醸成している。島を美しくすることは、個人の努力もさることながら、地域ぐるみの取り組みも必要になってくる。

この、地域ぐるみの取り組みとして、1917 年（大正 6)、竹富公民館の前身となる「部落会」

が結成され、地域総ぐるみの清掃活動が始まった[23]。清掃活動には、月毎の定例掃除[24]と、春・秋の大掃除、毎朝の掃除があり、大人から子どもまで総出で竹ぼうきをもって道を掃き清めるのである。石垣の下の道端には、花が植えられていて、白砂の道に彩りを添えている。個人で植えたものもあれば、婦人会が環境美化活動の一環として植えたものもある。花木の水やりは子どもたちの仕事である[25]。

春・秋の大掃除では、公民館役員が、各家の清掃ぶりを点検して回る慣習があり、今も受け継がれている。昔は、座敷の鴨居の汚れまで点検して回わるほどの力の入れようであった、という[26]。秋の大掃除の際には、公民館の人たちにより、「島の実態調査」[27]がおこなわれる。清掃活動と連動したこの調査は、島民が島の実態と、変化を知るよい機会になっている。併せて、島民が島の将来を共に考える機会となっている。

竹富島で心を引くのは、毎朝、家の前の白砂の道を掃き清める人びとの姿である。時間は決まっていないが、朝 7 時前後、人びとは竹ぼうきをもって道に出てくる。まずは落ち葉を拾って箕に入れ、次に竹ぼうきで白砂の道をならし、最後に別な竹ぼうきで白砂の道に掃き目をつける、といった手順である。島の朝は、この道掃除の音から始まるのである。

朝の道掃除は、道端の雑草を抜くことでハブの潜む場所をなくすためにする、という。また、毎朝、サンゴ礁の砂を道全体にいきわたるように掃くことで、道を清めるといった意味合いをもっている、ともいわれる。

竹富島は、観光業の手伝いに働きに来ている若者を多く見かける島である。この朝の道掃除は、よそからやってきた人間が島民と人間関係をつくっていく上でも大事な役割をもっている。島の飲食店に 1 か月住み込んで働きながら卒業論文作成のための調査をしていた小川莉恵は「竹富島の住民をつなぐもの」[28]に、こんなエピソードを載せている。

〈私も竹富島にいる間はできる限り毎朝掃除をした。掃除を通して、まず島の人の掃除に対する気持ちを知ることができる、また自分で島の人と話せる場を作れることから朝の掃除をする発想となった。（中略）掃除をしているうちに、いつ見られていたのか分らないが、近所に住む大山貞子さんから「いつも掃除ありがとね」と言われるようになった。さらに、ななめ向かいに住む有田修さんからは「お前が掃除した後は歩いていて気持ちがいいよ」と声をかけてもらった。その際は「やった」という嬉しさと共に、掃除は自分の家のためだけではなく、周囲の人との関係を上手に取り成す手段であることに気付かされた。〉

島に来て調査をしようとしたものの、なかなか島民に受け入れてもらえなかった彼女が、朝の道掃除を通じて、徐々に島民の中に溶け込んでいった様子を物語るエピソードである。民宿の場合、手伝いに来ているヘルパーが掃除にあたることが多いが、これもまた、外来者が島に溶け込む一つの場である、ととらえてよいであろう。

竹富島の白砂の道は、島民自らが掃き清めるだけでなく、このように、よそから島にやってきた者の竹富島を愛する思いをも含めて、美しく保たれているのである。

このように「重伝建」選定以前からおこなわれていた一連の環境美化活動[29]は、1990 年代も

衰えることなくつづき、今日にいたっている。竹富島を訪れた観光客は、美しく保たれた自然や集落景観に感動するとともに、それを支えている島民の不断の努力・高い志に心を打たれるのである。これもまた、島の大きな魅力である。

6. 地域住民の文化活動

竹富島は、よそからの風を取り入れて、島を活性化させよう、という気風をもった島である。上勢頭芳徳は、こんな話をする。[30)]

「“妻籠宿を守る住民憲章”は、売らない・貸さない・壊さない、の三本柱ですが、“竹富島憲章”には、貸さない、がはいっていません。外からの人にどんどん来てもらって、共に島を盛り上げてもらおう、という気持ちからそのようにしたのです」

ただし、土地を外部の人に売ることは、絶対にしないのである。ここに、竹富島の人たちの地域づくりの考え方がよくあらわれている。それは、海の彼方にあって、この世に豊穣をもたらしてくれる、と信じられているニライカナイの信仰にも、どこかつながりを覚えるものがある。

竹富島では、旧暦８月８日、ユーンカイ（世迎え）とよぶ神迎えの行事が浜辺でおこなわれる。ユーンカイは、海の彼方から神々が船に乗って竹富島に着き、島の西部のトモドイ浜にあるニーラン石に船の艫綱を結びつけて上陸し、穀物の種を配った、という神話に基づいた神事である。海を渡ってやってくる神のみならず、新たな活力をもたらす人を進んで迎えようとする気持も、ここに根源を見出すことができるのではないか。

竹富島の民芸、芸能、集落景観といった文化的遺産の価値発見にも、外からの風が刺激を与えたことも、また事実である。竹富島の生活文化に古くから注目したのは、喜宝院の上勢頭亨であり、彼を訪ねてきた文化人が、島民の文化的関心を高めた事実を見落とせない。亨の娘である上勢頭同子は、どのようないきさつで亨が郷土の文化に関心をもつようになったかを、次のように語る。[31)]

「父が島の人たちが使ってきた昔の民具などを集めるようになったきっかけは、小学校の先生からの一言でした。“亨君、皆が使ったものを大事にする心を一生持ちなさいね”、そんな言葉でした。先生のお褒めの一言が、人生を大きく変えたのです。昔は、島の中に、どこにでも物識の長老がいました。一歩一歩、歩くことによって、昔のことを教えてもらったのです。そのようにして、郷土の文化を知ることに目覚めたのです。そして、父は人から教えられた知識・智恵を次の世代に残していこうとしたのです」

上勢頭亨は、竹富島に伝わる祭礼の祝詞・御嶽の祝詞・伝説民話・古謡・民謡・狂言をことこまかに記録にとどめた。1968 年、南島古謡の収集に訪れた沖縄文化研究の権威・外間守善が、このノートを目にして腰を抜かさんばかりに驚いた。外間守善は、ノートすべてを原資料のまま、上勢頭亨の名で出版しようと取り計らった。そして、世に出たのが、不朽の名著『竹富島誌』である。

外村吉之介、バーナードリーチ、浜田庄司といった民芸運動の大家、竹富島を心のふるさととしてこよなく愛した作家・岡部伊都子、そして司馬遼太郎のいずれもが、喜宝院の上勢頭亨をたずねて竹富島を訪れている。バーナードリーチ来訪時の情景を、上勢頭同子は次のように語っている。[32)]

「父の集めたものをご覧になるため、バーナードリーチさんも来られました。リーチさんが“この焼き物はすごいですねぇ”と褒めると、父はリーチさんの言葉を、いちいちメモするのです。そして、一つ一つ丁寧に説明をする。モノすべてに歴史があるわけです。その頃は、まだ、今みたいな蒐集館はなかった。母屋で、箱の中から品物を一つ一つ取り出して、見ていただいていました。出したり入れたりしますから時間がかかります。また、父は急ぐことのできない性格だから、一つ一つ言わないと、次に進みません」

その情景が目に浮かぶ。まことにのどかな時代であった。また、上勢頭亨は、喜宝院を訪れる観光客に対しても、同様な態度で接し、じつに丁寧に説明をしていた、という。

上勢頭亨の蒔いた種が、竹富島の地域文化を見つめる島民の心に芽生え、やがて花開いていく。民芸への着目、伝統芸能の継承も、その流れの中にある、と受け止めてよいであろう。

1990 年代半ばの竹富島では、「全国竹富文化協会」が設立された（1996 年）。「全国竹富文化協会」は、竹富島の伝統文化の理解及び保存・継承をはかることによって、竹富島の振興・発展に寄与することを目的に設立された全国組織である。

「竹富島憲章」の保全優先の基本理念の一つ「生かす」に、「伝統的祭事行事を、島民の精神的支柱として、民俗芸能、地場産業を生かし、島の振興を図る」とうたわれている。この実践的組織として、「全国竹富文化協会」は、大きな役割を担うものである。「全国竹富文化協会」の本部事務局は竹富島（環境庁ビジターセンター「ゆがふ館」）に置かれ、竹富支部・石垣玻座間支部・石垣仲筋支部・沖縄支部・本土支部が設けられ、約 800 名の会員を擁している。「全国竹富文化協会」では、毎年、「星の砂文化講演会」を開催するとともに、機関誌『星砂の島』の刊行をおこなっている。講演会は、文化人と新たなネットワークを広げていく機会でもあり、1990 年代半ば過ぎ、積極的な文化活動への取り組みが始まった、ととらえてよいであろう。なお、「全国竹富文化協会」の総会は、島最大の祭である種子取祭の精算を終えた夜（奉納芸能の翌日）に開催される。それは、多くの郷友（東京・沖縄・石垣にそれぞれ竹富島出身者で結成する郷友会がある）が帰郷している日に当たっている。

「重伝建」選定以降、竹富島では、二つの大きな文化的催しが開催された。一つは、第 11 回全国町並みゼミ竹富大会開催（1988 年）、もう一つは、日本民芸協会「夏期学校」開催（1988 年、1997 年）である。第 11 回全国町並みゼミ竹富大会は、「重伝建」選定の翌年に開催された、島にとって大きなイベントであった。また、町並みゼミと同じ年に開催された日本民芸協会「夏期学校」は竹富公民館を会場に 3 日間の連続講座がおこなわれた。この二つの催事は、竹富島と外部の人との交流として、その果たした役割は少なくない。竹富島が観光地として発展していく陰には、このような文化的交流があったことを忘れてはならない。

7. 次世代を担う子どもたちへ伝える

地域づくりの課題の一つに、次世代への、志や思いの継承が挙げられる。「重伝建」選定以降、1990 年代にかけて、伝統文化の大切さを積極的に子どもたちに伝えていく試みがおこなわれるようになったことが特筆される。その取り組みは、地域の価値を見つめ直し、それを継承する地域づくり、としてとらえてよいであろう。

子どもを対象にした伝統文化継承の取り組みとして最初に起こったのは、1970 年代後半、島の方言を見直すために始まった「テードゥムニ大会」[33]である。ことの起こりは、このように紹介されている。[34]

〈方言がだんだん生活から切り捨てられている。しかし方言は地域文化を育んできた母胎であるし、何よりも話し言葉として、共通語よりぬくもりを持っている。地域文化の見直しのために、テードゥムニ大会をやろうじゃないか。〉

そんな話から始まった。主催は、竹富小中学校ＰＴＡで、竹富公民館と老人クラブが協力することになった。やり方は、島に伝わる伝説や民話を小中学生が五分ずつ話し、だれがうまく話せたかを競うコンテストである。孫の姿を一目見ようと、お年寄りが会場に大勢詰めかけた、という。

1980 年代に入ると、子どもたちは夏休みの出来事を方言で話したり、また先生も参加するようになった。この「テードゥムニ大会」は、1990 年代後半からまた違った意味合いを帯びてくる。次にそれを物語る新聞記事を紹介したい。[35]

〈若者がＵターンしてきて結婚し子供ができていくのはいいが、ほとんどが県外や島外からの嫁さんとあって純粋の島言葉を話せる子供は少なくなっていく。それでも継続して少しでも伝えていかねばとＰＴＡ文化部が中心になって、夏休みの金曜日はテードゥムニの日として先輩を招いて一緒に勉強している。〉

1993 年から島の人口は増加していくが、Ｕターンした若者の子どもたちの世代の課題の一つが、ここに現われている。この「テードゥムニ大会」は、夏休み最後の大きなイベントとして成長して今日にいたっている。

島における地域文化の伝承は、学校教育においても積極的になされている。竹富小中学校は、郷土に根ざした学習に力を入れてきた学校である。校門の塀には、数々の受賞を物語るプレートがはめ込まれている。1980 年代後半に、野鳥・自然観察といった、自然科学の分野で始まった竹富小中学校の体験学習は、やがて伝統文化の継承を指向する郷土教育に力をそそぐようになった。そして、1998 年、「博報堂伝統文化教育部門文部大臣奨励賞」を受賞するのである。伝統文化教育部門での受賞は、沖縄県下初の快挙であった。この受賞は、新聞記事に大きく取り上げられた。[36]

〈竹富小中学校は、九〇年度に県内で初めて「特色ある学校」の研究奨励校に指定され、「自然とふれあいを重視した郷土学習」のテーマで取り組んだほか、「郷土素材の教育化」として郷土の自然、文化、人材を効果的に活用。うつぐみ集会の推進や今年第二十一回を数えるテード

ゥンムニ大会の開催、島最大の祭・種子取祭への参加など、地域に根差した教育活動を展開している。〉

教育課程のなかに地域の文化や歴史を採り入れ、地域と一体となってやってきたことが高く評価されたのである。竹富小中学校の教育を支えているのは、教職員はもとより、地域の人びとの力が大きい。1998 年度の竹富小中学校の全校生徒数は 31 名。同年の島の人口は 284 名であった。上勢頭芳徳は、次のように語る。[37]

〈子どもたちは、自分の存在感を認識できる誇りが、この島が好きと言わせているのだろう。島を守ってきた先輩たちの思いは、確実に次の世代にも伝わっている。昨年（1998 年）はこの島に六人の赤ちゃんが誕生した。これほど子どもが生まれたのは 26 年ぶりのことであった。我々は、“子供は地域で育てるから、産めるものはどんどん産め”と、けしかけている。子どもを安心して産める地域はいい地域だ。〉

過去 5 回、学生たちを引率して上勢頭芳徳を訪ねたが、彼はこの話を、毎年、女子学生の前で披露する。その話には、理屈を抜きにした説得力がある。

1999 年から 2001 年にかけて、竹富小中学校は、ソニー教育資金論文で高い評価を受けている。いずれも郷土学習の体験論文である。郷土学習の中でとりわけユニークなものが、「竹富こぼし子ども育成会」が親子体験学習として企画した「由布島サバニ航海」である。稲作ができない竹富島の人びとは、戦後しばらくまで西表島に出作りに行っていた。西表島はマラリアの危険があるため、西表島に隣接する由布島に小屋がけをして稲をつくっていた。その由布島に向けて子どもたちがサバニ（伝統的な舟）を漕いで出かけるという、体験プログラムである。竹富島から由布島まで手漕ぎの舟で 3 時間の道のりで、かなり、サバイバルな体験学習である。

当時、竹富小中学校ＰＴＡ会長（1999 年度）・竹富こぼし子ども育成会長（2000 年度）を務めていた上勢頭篤は、次のように語る。[38]

〈今の子どもは昔より頭はよくなったが、知恵がつかない。竹富ではそうならないように地域ぐるみで教えている。これは自負できる。秋のタニドゥイ（種子取祭）では小学生も舞台に立つ。竹富では一人ひとりがすべて主役だから、楽しいと思うよ。〉

上勢頭篤は、あの「竹富島を守る会」を立ち上げ、外部資本の開発行為から島を守ろうとした上勢頭昇の次男である。当時、40 歳になったばかりであった。オヤジの志・地域を愛する気持ちを、学校と連携しながら次世代の子どもたちに受け渡していくことが、その頃の篤の役目であった。

伝統芸能を次世代に教えるのも、竹富島の大人たちの役目である。竹富島の三集落には踊りの師匠がそれぞれいるが、その一人が、上勢頭亨の娘・同子である。2009 年の旧盆・アンガマ行事や、2010 年の種子取祭のとき、私は竹富島に滞在していた。その時、踊り子に同子が鋭い眼を光らせていた光景が忘れられない。そこには、弟子に踊りを仕込んできた師匠の眼差しがあった。上勢頭同子は、歌・踊りについて確固たる考えをもっている。[39]

「私は踊りを教えていますが、形から入っていくものと、心から入っていくものの二つがあ

ります。人によっては、最初に心構えだけ教えることがあります。何にも言わずに形だけ教えることもあります。人それぞれやり方が違います。この人は心から教えたほうがいい、この人は形から入ったほうがいい、というのが直感的にわかります」

踊りには、形と心があり、その両方を体得しないとダメだ、というのが同子の持論である。同子は、例を挙げて話す。

「神前奉納の踊りは、人を意識してはダメなんです。観客を意識したら神前奉納にはならない。そこを教えるまでが大変なんです。公民館で踊る時には、これは人間のコミュニケーションですから、人を意識してもいいのです。お盆の踊りは、ほっ被りをしていますが、これは亡くなった先祖が形を変えてこの世に戻ることを意味しています。その先祖の役目をしているわけですから、自分たちが先祖といっしょに踊っているという意識が必要です。そういう風に、私は、踊りを分けながら教えています。目的が何かを教えます。その目的によって踊り方が変わるのです」

踊りの本質を仕込むのが“シン入れ”だ、という。また、歌について、次のように語る。

「私は、毎月１回保育所に行きます。わらべ歌の中の音階がじょうずにとれないと、種子取祭の歌が歌えなくなります。私が心配なのは、それなんです。音が正しく伝わらないことです。これは、子どもがわらべ歌を歌わなくなったからです。歌が微妙に変わってきました。どうしても出せない音がでてきたのです。その音が出ないと伝統芸能は伝わりません」

音階を正確に受け継いでいくためには、子どもの頃からきちんと習わないとモノにならない、という。さらに、話は、囃子に及ぶ。

「囃子がうまくできないのも、心配です。それは、おなかに力を入れる作業が日々の生活の中でなくなったからです。“ン”といった音を出せといっても、出ない。“ンー”と間延びして、締まらない。力の出し方が分からないのです。民俗芸能は、それがなくなったら、力強さは消え失せます。今の人は、囃子ができない。声を出してやる踊りができない。鍬を耕す所作もきまらない。そういう生活がなくなってしまったからです」

生活があまりにも変わりすぎてしまったので、一つ一つ物事を伝えていくことが困難を極める、としみじみ語るのである。

ほかに、次世代への伝統文化の伝承として、U ターンした男性や、結婚して島民となった女性に対しておこなわれる、種子取祭・結願祭に奉納される狂言・踊りがあるが、このことについては、別稿に纏めたい。

まとめ

以上の調査研究を通して学んだことを要約すると、以下のとおりである。

竹富島が「重伝建」に選定（1987 年）されたバブル期から 1990 年代にかけては、沖縄県の観光地としての存在感がますます高まっていった時期に当たっている。沖縄県においては、特色ある自然風土と独自の文化遺産を活かした観光レクレーションの場の開発整備等を促進する

施策が進展し、観光を地域経済の活性化の柱としてより重視する方向が示された。このような時代に後押しされ、竹富島にもまた、多くの観光客が訪れるようになった。この時代の中で、島民は、バブルに浮かれることも、時代の流れに翻弄されることもなく、かたくなに自律的な観光地づくりを貫いてきた。

それまで減り続けていた竹富島の人口は、「重伝建」に選定後 6 年目（1993 年）にして上昇傾向に転じた。いったん島を離れた若者が帰島し、観光業の後継者として島に根をおろしていく現象が起こったのである。伝統的な赤瓦の集落景観を保存したから、竹富島で観光業が成り立つようになった、という見方は、やや短絡的である。この時期、単に古い町並みを保存して観光客を誘致して経済の活性化につなげようとする方式は、すでに過去のものになっていたからである。

それでは、竹富島はいかにして地域の魅力を創生して、人を惹きつけたのであろうか。それは、集落景観の保全を基軸に、自然景観の保全、伝統工芸・伝統芸能の継承を含めた総合的な地域づくりが開始されたからではないか。その一つは、島民主体の集落景観の保全活動である。すなわち、「竹富島憲章」制定に伴い、地域の自治組織である公民館に「集落景観保存調整委員会」の設置が盛り込まれ、「心なごむ風格のある島づくり」の活動が開始されたのである。それは、単に集落景観を残すことにとどまらず、そこに暮らす人びとの精神文化の高揚を含めての活動であった。

ところで、竹富島の集落景観を構成する伝統的な民家を保存することは、島民にとってどのような意味をもつものであろうか。まずは、風土に合った住まいの良さが住民に認識され、その良さを評価したうえでの継承が挙げられる。次いで、島の伝統行事である祭事を執りおこなう空間として、伝統的な住まいを維持する重要性が島民に認識されている点が指摘できる。祭りをとおして神に奉仕することは、島に生きるものにとってきわめて大切なことであり、その意識が、伝統芸能・衣装（伝統工芸）を含めて、伝統的な住まいを継承する原動力になっている。

竹富島は、自然をはじめ島そのものが、清らかな空気に包みこまれている。竹富島の集落のたたずまいは、島民のたゆまぬ掃除により保たれている。島を美しく保つ習慣は古くから受け継がれていた。竹富島を訪れた観光客は、美しく保たれた自然や集落景観に感動するとともに、それを支えている島民の不断の努力・高い志に心を打たれるのである。それが、ごく自然に生活の中に根づいていることが、竹富島の魅力を醸成している。

1990 年代に起こった、文化活動として、「全国竹富文化協会」設立が挙げられる。これは、伝統的祭事行事を島民の精神的支柱として、民俗芸能・地場産業を生かし、島の振興を図るべく実践組織としてつくられたものである。そして、この組織を通じて、島民と、石垣島・沖縄本島・東京在住者の文化交流がより円滑に促進されるようになったことが、意義深い。

「重伝建」選定以降、1990 年代にかけて、伝統文化の大切さを積極的に子どもたちに伝えていく試みが積極的におこなわれるようになったことも特筆される。一つは、竹富小中学校と島

民が連携しておこなう、地域の文化や歴史を採り入れた体験学習である。また、地域の祭事が断絶しないようにと、次世代への伝統芸能の継承にも力が注がれている。

ただし、伝統文化の次世代への継承の努力がなされているものの、避けて通れぬ問題も潜んでいる。島には、小中学校しかない。そのため、高等学校入学時には、すべての子どもたちが島を出て行き、やがて島外で就職するのである。伝統芸能を受け継ぐのは、Uターンして島に戻った時点で、そこに空白期間が生ずる、という課題がある。しかしながら、この現実を承知の上で、伝統文化の継承に力が注がれている。

集落景観とともに島を特色づける伝統芸能は、意外にも直接的な観光客誘致と無関係である。2010 年、島最大の伝統行事であり、数々の伝統芸能が奉納される種子取祭を拝観して気づいたことがある。粟の豊作を予祝するこの祭りは、島民にとってカミに踊りや狂言を奉納するものであり、島出身者にとって故郷との絆を確認する要素が強い、という事実である。祭りを見物する人は大勢いるものの、その中にいわゆる観光客は少ないのである。祭りを賑わす露店もまったく見られない。奉納芸能のある二日間、島では観光客に人気のある水牛車も休業、民宿も常連客を除いて断るところが少なくない。とにかく、仕事よりも祭りが優先で、観光客の世話などしていられない、といった不思議な空気が流れている。

竹富島における集落景観及び地域文化を守り活かす地域づくりは、あくまで島に暮らす人間が、自らにとって豊かで魅力ある土地を創りあげようとするものである、といえる。その心意気が島に充満し、結果として観光文化の振興につながっている、といえるのではないか。

謝辞

本稿は、愛知淑徳大学研究助成成果報告の一部である。研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げるとともに、調査研究を実施するに当たり、インタビュー調査にご協力いただいた上勢頭芳徳さん（喜宝院蒐集館長）、上勢頭同子さん（喜宝院住職）、上勢頭篤さん（民宿泉屋）ならびに関係者各位に感謝申し上げたい。

注

1) 谷沢明「沖縄県竹富島における観光文化に関する考察」（『愛知淑徳大学論集』第 14 号、2009 年、所収）
2) 谷沢明「1970 年代前期の開発と保存に関する動向～沖縄県竹富島における観光文化研究（1）～」（『愛知淑徳大学論集』第 15 号 2010 年、所収）
3) 谷沢明「1980 年代の集落保存に関する動向～沖縄県竹富島における観光文化研究（2）～（『現代社会研究科研究報告』第 5 号、2010 年、所収）
4) 沖縄県「沖縄県入域観光客数推移（暦年）」による
5) 南木曽町「木曽妻籠宿保存計画の再構築のために妻籠宿見直し調査報告書」1989 年、南木曽町
6) 前掲 5） p 33
7) 立ち上げ当初、「集落景観保存調整委員会」に名を連ねていた老人会代表・婦人会代表・青年会代表は、現在、公民館議会委員に位置づけられているため、含まれていない。
8) 「たきどぅん」№1、1986 年 6 月 16 日、竹富公民館
9) 「妻籠を愛する会」は、集落全体を残していこうということで、地区内全住民の参加により 1968 年に結成された。「保

存にあまり賛成でない人たちも長い年月をかけて話し合えばやがては理解してもらえる」、そのような考え方に基づいている。

10) 「妻籠を愛する会」元理事長・小笠原宏氏へのインタビューによる

11) 竹富公民館役員組織は、館長・副館長・主事・幹事・事務局・顧問（3名）・公民館議会委員（参議員6名・議員6名・老人会代表・婦人会代表・青年会代表・町議会議員・学校長）・監査（3名）・町並み調整委員（12名）・財産管理委員（6名）・公民館運営検討委員（6名）から構成されている。人員構成は、各支部（東集落、西集落、仲筋集落）から均等に選出するため、執行部・事務局を除いて、三の倍数になっている。

12) 上勢頭芳徳「種子取祭と町並み保存」（「八重山毎日新聞」1986.11.1）

13) 森下愛子は愛知淑徳大学学生。卒業論文制作のため、竹富島に滞在中、何度か委員会を傍聴した。

14) 公共事業の場合は、まず教育委員会に「協議書」が提出される。そして、教育委員会は、その内容を調整委員会に相談を持ちかけて、必要な注意事項を事業主体に配慮願う、という形がとられている。

15) 竹富町教育委員会「竹富町景観形成マニュアル」1994、竹富町教育委員会

16) 「竹富島景観形成マニュアル」では、伝統的家屋形態の数値的分析がなされ、これを踏まえた景観形成に貢献できるような建物のモデルの提案がおこなわれている。

17) 上勢頭同子さん、2009年3月のインタビュー調査

18) 上勢頭芳徳氏、2009年3月のインタビュー調査

19) 上勢頭芳徳氏、2009年3月のインタビュー調査

20) 外村吉之介「世にも美しく純粋な姿」（『南島通信、沖縄の民藝』、1962年、倉敷民芸館、所収）

21) 水尾比呂志「竹富島のこと」（『民藝』1963年、日本民芸協会、所収）

22) 司馬遼太郎『街道をゆく6沖縄・先島への道』1978年、朝日新聞社

23) 「八重山毎日新聞」（1982.7.27）

24) 「八重山毎日新聞」（1983.5.20）には毎月1、15日の月2回の掃除があったことを示す記事がある。また「同」（1999.10.2）には、毎朝の清掃と毎月15日の清掃と出ている。月毎の清掃活動は、時代によって変わったものと思われる。

25) 「八重山毎日新聞」（1986.7.11）

26) 「八重山毎日新聞」（1983.5.20）

27) 実態調査では、世帯数・人口はもとより、放牧牛・水牛・山羊・鶏・犬・自動車・バイク・自転車・船舶・レンタバイク・レンタサイクルの数が調べられる。近年は猫の数まで調査項目に入っている。

28) 小川莉恵「竹富島の住民をつなぐもの」（清泉女子大学卒業論文）、2009年

29) このほか、夏には、「国立公園クリー作戦」（1981年～）の環境美化活動が毎年おこなわれている。この活動には、子ども会から老人クラブまで参加し、大人は海岸の、子どもは海岸にいたる主要道路の空き缶拾いに精を出す。

30) 上勢頭芳徳氏、2009年3月のインタビュー調査

31) 上勢頭同子さん、2009年3月のインタビュー調査

32) 上勢頭同子さん、2009年3月のインタビュー調査

33) テードゥムニ大会は1977年から始まった

34) 「八重山毎日新聞」（1977.11.4）

35) 「八重山毎日新聞」（2000.9.24）

36) 「八重山毎日新聞」（1998.8.20）

37) 「琉球新報」（1999.1.27）

38) 「琉球新報」（1999.7.3）

39) 上勢頭同子さん、2009年3月のインタビュー調査